風景デザインレター from 九州(第38号)

人生も、そして、いろいろなことすべてにおいて、頑張るということの大切さを理解し、進んできたのですが、ここにきて、頑張らなくても何とかなるという発想が、マイナーなイメージではなく、ましてや自堕落的でもなく、むしろポジティブな力となってこれから復活してくるぞというメッセージ込みのデザイン本に出会いました。さて皆さんは以下に思われますでしょうか。

今年はこれでおしまいです。ぐだぐだとお付き合いいただきありがとうございました

【「これでいいのだ！！」のパワー】

「これがいい」から「これでいい」デザインへ。

今年最後を締めくくる紹介本として、誠にふさわしい？と思われる「マゾヒスティック・ランドスケープ(ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ・ｴｸｽﾌﾟﾛｰﾗｰ著)」の中に紹介されている原研哉氏の言葉である。彼の本は、以前「デザインのデザイン」を紹介したが、ここでも中心的なポジションでいろいろな提言を行っているが、そのなかの一つがこれである。

「これがいい」は、サディスティックで、「これでいい」がマゾヒスティックである、このことは、なんとなくわかるでしょ。

これまでの公共(パブリック)デザインは、「これがいい」、解説的に書くと「これが正解」という、一見正しそうに見えるが、押し付け的な仕方でやってきたというのだ。しかし、現在、すでにいろいろな分野で、それに対抗した市民の自発的な「にじみだし」が起きているということを多くの事例写真を持ちいて解説する。

そう、「これでいい」デザインとは、専門家によるきちんとデザイン論やデザイン技法、そしてデザイン能力を発揮して考えられたレベルの高いデザインではなく、もっと、庶民レベルの自然発生的なデザイン？ということである。

そういえば、ということで、天才バカボンのパパの「これでいいのだ！！」というメッセージを思い出し、赤塚不二夫が漫画哲学として数十年前に提示したものが、現実社会でやっと理解されつつあるということなのかもしれない。

これまで「これでいい」ということは、「これでもいい」とイメージがダブって、一番正しいということではないが間違いでもないというネガティブなイメージも重なる。そして今、「これでいい」というものが認められつつあるという。

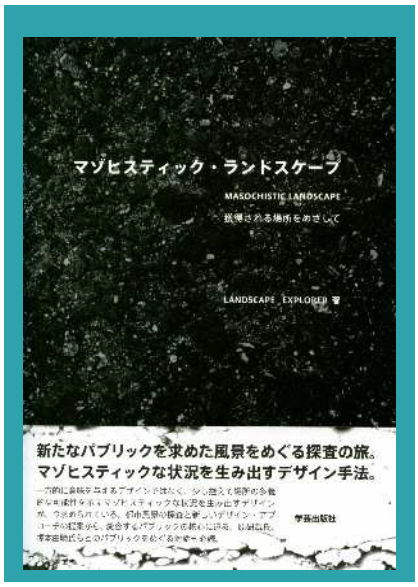
その根源には、これまでの世の中は、自信社会的な側面（自信を持って人に進めるプレゼンテーションが良いという考えの社会）が表に出ていて、ともかく、有名人や専門家が、いいもの、わるいものを自信を持って判断し、それを押し付けるということが起きていたという歴史の積み重ねがあったし、今も、存在する。

しかし、パブリックなものに限っては、本当にそれでいいのという原氏の問いかけである。

パブリックなもの、つまりはみんなのものはみんながいいとおもえば、「それでいいのだ！！」と納得した方が、いいものになっているのではないのか。乱暴に言えばそういうことだろう。

これは、一般的な個性というものを大切にして、物の価値観の押しつけという画一化の社会に対する抵抗かというとそうではなくて、自然力がもつ当然の帰着なのかもしれない。あるいは、やはり、疲れがでてきたということなのだろうか、そんなに力んで頑張らなくても、もっと肩の力を抜いて、楽に、そして楽しくやったらいいではないかという発想がでてきたのかもしれない。

そういえば、私の若いころ好き



好んで人に紹介していた言葉に「楽しんでも楽をせず」というのがあったが、今振り返ると、やはり少し力みが入っている。

もう少し余白があるので、ぐだぐだ書かせてもらうと、自然のもつ自己組織化的な力、例えば、雨粒は、涙型ではなく球状であるというが、その理由は、表面張力でもっとも少ない力でまとまるのが球だからということで、これを言葉を変えると、「自然は楽(らく)したがる」というのだという話があった。

これらの自然現象における楽をするということを解説してみると、楽をするとは、だらけるという意味とは異なるもっと積極的な意味が見いだせる。それは、最小限の力できちんと収まることだろう。

それは、例えば、B級グルメに相当するようなものかもしれない。ミシュランの三ツ星レストランの食事ではなく、だれもが手軽に楽しめて、それなりに満足する食事のようなもの。パブリックデザインのなかで、日本のあるいは地域のシンボルとなるような土木施設は別だろうが、身近な土木施設のデザインは、みんなでああだこうだと何となくやっていると自然にこんな形になっちゃった、そうだなあ、これでいいんじゃない。

そんな感じ。だめですか？・・

【来年もよろしく！！　続く】